武蔵野日曜聖書講筵

神像

――コロサイ書第１章１～20節――

１９９２年４月26日
小池辰雄

神の本願によって　キリストの遣わされ者　恩恵を土台とした平安　キリスト信入の世界　御霊にあって抱ける愛　愛も神から来る　キリストの喜びの中に　両極を渾然一如として　無罪の根源現実の中に聖霊が　見得べからざる神の像　キリストのエイコーン　十字架の血によって平安を

【コロサイ１】

1 神の御心によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ及び兄弟テモテ、2 書をコロサイに居る聖徒、キリストにありて忠実なる兄弟に贈る。願くは我らの父なる神より賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。

3 我らは常に汝らの為に祈りて我ら主イエス・キリストの父なる神に感謝す。4 これキリスト・イエスを信ずる汝らの信仰と凡ての聖徒に対する汝らの愛とにつきて聞きたればなり。5 斯く聖徒を愛するは、汝らの為に天に蓄えあるものを望むに因る。この望のことは汝らに及べる福音の真の言によりて汝らがかつて聞きし所なり。6 この福音は全世界にも及び、果を結びて増々大になれり。汝らが神の恩恵をききて、真に之を知りし日より、汝らの中に然りしが如し。7 汝らが、我らと共に僕たる愛するエパフラスより学びたるは、この福音なり。彼は汝らの為にキリストの忠実なる役者にして、8 汝らが御霊によりて懐ける愛を我らに告げたり。

9 この故に我らこの事を聞きし日より汝等のために絶えず祈り、かつ求むるは、汝ら霊のもろもろの智慧と顛悟とをもて神の御意を具に知り、10 凡てのこと主を悦ばせんが為に、その御意に従いて歩み、凡ての善き業によりて果を結び、いよいよ神を知り、11 また神の栄光の勢威に随いて賜うもろもろの力によりて強くなり、凡ての事よろこびて忍び、かつ耐え、12 而して我らを光にある聖徒の嗣業に与かるに足る者とし給いし父に感謝せん事なり。13 父は我らを暗黒の権威より救い出して、その愛しみ給う御子の国に遷したまえり。14 我らは御子に在りて贖罪すなわち罪の赦を得るなり。15 彼は見得べからざる神の像にして、万の造られし物の先に生まれ給える者なり。16 万の

物は彼によりて造らる、天に在るもの、地に在るもの、見ゆるもの、見えぬもの、或は位、あるいは支配、あるいは政治（まつりごと）、あるいは権威、みな彼によりて造られ、彼のために造られたればなり。17彼は万（よろず）の物より先にあり、万の物は彼によりて保つことを得るなり。18而して彼はその体（からだ）なる教会の首（かしら）なり、彼は始にして死人の中より最先（いやさき）に生まれ給いし者なり。これ凡ての事に就きて長（おさ）とならん為なり。19神は凡ての満足（みちた）れる徳を彼に宿して、20その十字架の血によりて平和をなし、或は地にあるもの、或は天にあるもの、万（よろず）の物をして己と和（やわら）がしむるを善しと為給（し）いたればなり。……

●神の本願によって

今日からコロサイ書に入ります。パウロがローマで書いた三番目の獄中書翰です。コロサイはフリギヤ州の町です。コロサイにはパウロは行ったことはない。エパフラスという人が多分、コロサイの教会をつくったんですが、それがパウロの弟子で、ローマにやってきて、パウロが彼からいろんなことを聞いて、それでこのコロサイに手紙を書くということなんです。大体、紀元61年頃です。このエパフラスは後でパウロと同じように牢屋に入れられてしまう。ピレモン書というのがありますが、これもやはり獄中書翰の一つです。それの奴隷のお弟子も、これがまた使いに来たというようなこともあるわけで、間接なわけです。コロサイの教会のことを聞いたものだから手紙を書いた。というのは、この辺はかなり、他の密教だとか、今までのユダヤ教だとか、そういう影響をかなり受けているから、それで、注意をするという気持もあったようです。

コロサイ書1章です。

1神の御心によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ

ギリシア語でいうと、この「パウロス」というのが一番先にくる。

「パウロ、キリスト・イエスの使徒、神の御意によって」

と。あなた方もみな、

「神の御意によって」

です。教会や何かでは、

「信仰は一つの決意である。決意によって信仰に入る」

と、よく決意ということを言うが、人間の決意の信仰ではダメなんです。

「何か知らんけれども、神さまに呼ばれた。結局、自分がクリスチャンになっているのは神の選びによっているんだ」

ということです。皆さんはみな選ばれたる人なんです。御意によるということは、そういう意味で、

「一人一人、どういう御意か」

という御意の内容は一人一人全く独特なものです。そういう自覚が――他覚といってもいい、神という他者を覚えること――大事なんです。主体は神の側にある。神・キリストの側にある。方程式で言うんじゃない。そういう気持に知らない間に、どうしてもそうなってしまう。そこが力の根源なんです。だから、「本願」という言葉が私は好きです。

「神の本願によって」

ということ。それはもう一つ具体的にいうと、

「キリストの選びによって」

です。クリスチャンというのは、自分でクリスチャンになったのではない。キリストの選びによって、神の本願によってです。こちら側がどうのこうのではない。こちら側の前提によるのではない。よかろうが、悪るかろうが、神さまの選びというのは、一人一人には特別なんです。そういう意味で、

「神の御意(みこころ)によって」

ということです。パウロなんか全くそうなんだ。キリストにひっくり返されたんだから。キリストの御意によらなければ、サウロはとてもこんな使徒にはなれなかった。

●キリストの遣わされ者

我々は、

「使徒的信交」

と、よく言うでしょ。「使徒」、使わされたる徒(もの)。「アポストロス」の「アポ」というのは「…から」という字で、「から遣(つか)わされたる者」ということ。キリスト自身がおっしゃったでしょ。

「私は自分の意志によったのではない。神に遣(つか)わされた者である」

と。「遣わされた者」という言葉は実はキリストが最初に使った。キリストは正に父なる神の遣わされ者なんです。使徒たちは皆、

「キリストの遣わされ者」

です。我々もそういうこと。だから結局、使徒と聖徒とは同じことなんです。

「聖」というのは、「カードーシュ」というヘブライ語からきているんですが、日本語でいうと、神聖の聖というのは聖(きよ)いという字だけれども、実は、「聖徒」という訳が果たして良いかは分からない。聖徒というのは「分かたれたる者」いう意味なんです。だから、

「神さまに分かたれて、地上の者ではなく、天界の者にされた者」

というのが、聖徒という意味です。この「聖徒」という「聖」の字に、むしろ我々は躓いてしまう。

「なかなか聖徒になれません」

なんて、そうじゃないんだ。

「区別されて、分かたれたる者、この世の人間でなくされた者」

それが聖徒です。だから、使わされたる者と質的には同じことになる。それから、「選び人」も同じこと。だから、選び人、使わされたる者、分かたれたる者はみな同じです。要するに、皆、主動は神の側にきている。

[1]神の御心によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ及び兄弟テモテ、

「兄弟テモテ」とあるが、テモテは本当は弟子なんだけれども、それを兄弟と親しく言っているわけです。我々は皆、キリストにおいて兄弟姉妹です。キリストはまた、「友」とまで我々のことを言われた。モーゼもヤーヴェーに「友」とも言われた。親しい言葉です。

[2]書(ふみ)をコロサイに居る聖徒、キリストにありて忠実なる兄弟に贈る。

「忠実なる」という言葉は、「信仰のある」と同じことです。この「信仰」「ピスティス」という字は本当は、

「裏切らない信実」

ということ。信というのは、「相手を信ずる」という、お互いの関係が裏切りがないということです。裏切りというのが一番悪いんだ。忠信という言葉もある。信とは「人偏に言」と書く。おもしろいね。人格的な言ということ、裏切りがない。「キリストにありて」は正にその通り、「エン・クリスト」の訳です。

●恩恵を土台とした平安

願くは我らの父なる神より賜う恩恵(めぐみ)と平安と汝らに在らんことを。

よく、「恩恵と平安」と書いてある。恩恵があれば、当然、平安がくる。平安の根拠は恩恵なんです。だから、「恩恵と平安」という言葉は、恩恵による平安、恩恵を土台とした平安ということ。

「神・キリストとの縦の関係は平安と言い、横の関係は平和と言う」としょっちゅう私は言っている。そういうようにハッキリ区別する人はあまりいないようだ。ギリシア語は同じ言葉で、「アイレーネー」という字だけれども、日本語はそこが大変いい。日本語というのは非常にいろんな区別のできる自在な言葉です。ヨーロッパの言葉は一つの語でいろんな意味をもつことが多い。ところが、日本語は一つの言葉が表現がかなり限定される――そうでないものもありますけれども――それだけ凄いんだ、幅がある。

「恩恵と平安」と書いてあっても、「恩恵により」でもいいし、「平安にあって」でもいい、どちらでも構わない。二つのものと思わない方がいい。

「恩恵を土台にしたところの平安が汝らにあらんことを」

と。普通の常識の言葉でいうと

「あなたが幸せであるように」

と、日本人はよく幸せという。あの幸せというのはダメなんだ。この世の「幸せ」なんて、すぐひっくり返ってしまう。非常に浮動的だ。雲みたいな幸せはダメだ。本当の幸せとい

うのは、人に喜びを与え、助けを与える。それが本当の幸せなんだ。こっちから与えるものだ。だから、

「**恵福（さいわい）なるかな**」

と書く。恵が土台になってない幸せはダメだ。この「恵福」というのが幸いであり、本当の幸せなんだ。

私は漢語の熟語が好きです。いわゆる日本語では表しきれない。

「しあわせ」というのはどういう字か。「あわせる」というのだから、「しあわせ」の「し」は何か？　至福という字がある。至（いた）る福（さいわい）、最高のさいわいということは、動かないということ。至（し）というのは、比較的な概念でない絶対的な概念です。至善だとか。究極的なという意味だ。「究極的な幸い」ということだ。我々はキリストにあっては、究極的な幸い、至福にある。この世の幸い、いわゆる幸せがどんなに動こうが、そんなことは問題でない。むしろ、逆境にある時には逆に至福の世界に入る。

「どうも私は不幸せでね」

なんて、かこつことはないんだ、クリスチャンは。

「何でもござれ」

と。本当の力が来ると、聖霊の力がくると、そういうことになる。

「恩恵と平安」なんていう二段構えの言い方をされると、私は困ってしまう。

「恩恵即ち平安」

と、パウロはそういうところをもっと大胆に言ってもらいたい。仕方がない、相手が相手だったんだから。

●キリスト信入の世界

3 **我らは常に汝らの為に祈りて我ら主イエス・キリストの父なる神に感謝す。**

パウロが「常に祈りて」というと、本当に掛け値なしに彼は祈っているんだ。

「祈って感謝している」

という。祈ってどうなるかと思っているんじゃない。祈って感謝している。

4 **これキリスト・イエスを信ずる汝らの信仰と凡ての聖徒に対する汝らの愛とにつきて聞きたればなり。**

この訳はダメだ。「…に対する信仰、…を信ずる信仰」はダメだ。

「キリスト・イエスの中における信交」

なんです。これは正に

「エン・クリスト」

です。だから、私は「信仰」の「仰」の字は、中に交わって入るから交、「信交」と書きたい。今までの概念を突破しなければダメです。我々のは信交、交わっている世界なんです。中

に居るんだ。相互内住です。

「我なんじの中に、汝わが中に」

という。パウロはそのことを散々言っている。「に対する信仰、を信ずる信仰」ではない。

「の中における信交」

です。キリスト信入の世界です。信じ入る、祈り入る。入らなければダメなんです。

皆さん、本当にそういうつもりで祈っていますか、そうしたら、キリストの中に入ったら楽でしょうがない。

「まだ私はダメですから、なかなか入れません」

なんてダメだから入るんだよ。「ダメですから、入れない」ではない。ダメだから入るんです。

「キリスト・イエスの中における信交」

「エン・クリスト」なんです、正に。我々は「エン・クリスト」をダテで言っているのではない。本当に現実として言っているんだ。あなた方は、そういう意味で、選びの器なんだ。

汝らの信交と凡ての聖徒に対する汝らの愛とにつきて聞きたればなり。

これもダメ、「に対する愛」ではない。これは英語でもドイツ語でも、対する式な前置詞を使うから困る。これはギリシア語の「エイス」という字で、「の中へと」ということ。「聖徒の中へと」の愛です。中へ入っていく。「エイス」というのは「エン」よりもまた動的なんです。「エン」というのは「の中に居る」ということ。「エイス」というのは、

「の中へと、中へ入っていく」、「ヒナイン」（独）、「イントゥー」（英）

なんです。

「凡ての聖徒の中へとの汝らの愛」

ということ。そういう言い方は普通はしないものだから、「に対する」なんて言うけれども、常識的な訳をしたらダメだ、聖書はいわゆる常識的な訳では。言葉はもっとハッキリと使う。

「凡ての聖徒の中へとの汝らの愛について聞いた」

ということ。「について」も私は嫌いだ。ルターが、

「クリスチャンの自由について」（フォン　デァ　フライハイト…）

と書いたが、「について」ではない。それを直ちに話すんだ。

「私はクリスチャンの自由を告白している。について語っているのではないんだ」

と。「…について」と、みんな論文に書いている。論文というのはちょっとズレるんだ。本当の文章は告白なんです。たとえば、プラトンの哲学は、「について」の哲学ではない。プラトンは劇的に、対話的に告白している。だから、プラトンの哲学は凄い。理性的に、「ついて」書いているのはダメなんです。普通はそれを学問といって、それを学的だという。

「告白はちっとも学問じゃない」

なんて、そうじゃない。学問を越えた世界なんだ。プラトンの本当のよさはそういうところにある。

●御霊にあって抱ける愛

5 **斯く聖徒を愛するは、汝らの為に天に蓄えあるものを望むに因る。**

ここはさすがにパウロだ。「天に蓄えあるものを望む」と。「天に宝積める者は…」という。これが正にそうだ。我々は天に蓄える。地上で蓄えたってダメだ。そんなものは皆消えてしまう。「天に蓄えあるもの」なんて言わなくたって本当はいいんだ。我々は天属になる。天に属する者になる。それが目的なんだ。

この望のことは汝らに及べる福音の真の言によりて汝らがかつて聞きし所なり。

よきおとずれ、楽しき音信。福音、喜びの音信。「ユウアンゲリオン」の「ユウ」という字はそういう意味です。「アンゲリオン」は「アンゲロス」で、天の使いのことだから。

「天の使いが善き音信を持ってきてくれた」

という、具体的にはそういうようなことです。

6 **この福音は全世界にも及び、果を結びて増々大になれり。汝らが神の恩恵をききて、真に之を知りし日より、汝らの中に然りしが如し。**

もちろん、その当時の全世界、地中海の各所です。パウロはそれをちゃんと見て、霊視しているわけだ。実際、彼がその土台をつくったから。

我々は恩恵という言葉においては具体的にはキリストの他は考えない。神の恩恵はキリスト、そして具体的に言うとキリストの言葉と業です。そして、もっと本質的にはキリストの生命です。キリストの生命を私たちは生命しているのが、恩恵の現実です。

7 **汝らが、我らと共に僕たる愛するエパフラスより学びたるは、この福音なり。彼は汝らの為にキリストの忠実なる役者にして、**

「僕」はもちろんキリストの僕ということです。

「君たちはエパフラスから聞いたろう、私は直接にはお前達には言わなかったけれども」

というわけだ。

8 **汝らが御霊によりて懐ける愛を我らに告げたり。**

これも「御霊によりて」ではない。「御霊にあって」だ。

「御霊にあって抱ける愛」

です。御霊になければ、本当の愛はない。どうしても改訳しなければダメだね。前置詞というのは大事なんですから。「よりて」という言い方は、手段方法になってしまう。「よりて」もこの「因りて」ならいい。それが原因となっているなら。だけれども、これが原因になって、正に「の中」「エン」なんだから。

●愛も神から来る

ギリシア語には、「愛」という字が三つある。これをよく神学者が区別する。

「エロースの、フィロースの、アガペーの」

と区別する。だけれども、私に言わせると、エロースであろうが、フィロースであろうが、アガペーであろうが、全部、神から来ている。神さまはそういういろんな愛をくださったんだから。元々、神によっている。一般にエロースというと、何か妙なことを考えるけれども、そうじゃない。全部、これは神さまから来ているんだから。それを善用すれば、全部それは神における幸いなんだ。ティリッヒという神学者もそれを言っている。

「普通はエロースとアガペーとを分けるけれども、エロースは地的な愛で、アガペーは天的な愛である。両方なければ本当の愛ではない」

という言い方をしている。だけれども、私に言わせると、

「どういう愛でも本来神から来ている」

と。そういう気持をもっていたのはゲーテなんです。そうすると、本当にくったくのない、豊かな気持になる。気持といったらおかしいけれども。

だから、すべて神から発している。地上の一切のものは太陽の光によっているじゃないですか。全部、どんなのものも、毛虫も毛虫の存在の理由がある。だから、チャップリンが毛虫を殺さなかった。毛虫がいたら、普通なら踏みつけて殺してしまうところを、つまんでバラの中に入れてやった。それが自然の法則だと。

花や葉にいろんな虫がつくと、殺虫剤をまく。それはある意味において仕方がない面もあるけれども、実は、喰わせておけばいいんだ。余り喰うからおかしなことになってしまうけれども。それでも、自然の法則に任せればいい。そういうことが原則なんだ。それが行き過ぎたら、自然も困った面もあるけれども。何でもかんでも殺してしまったら、これはうまくない。そうしたらば、植物も成り立たなくなる。動物も成り立たなくなる。人間も成り立たなくなる。全部ダメになる。自然の法則というのは非常に大事なものだ。

●キリストの喜びの中に

9 **この故に我らこの事を聞きし日より汝等のために絶えず祈り、かつ求むるは、汝ら霊のもろもろの智慧と顛悟（さとり）とをもて神の御意を具（つぶさ）に知り、**

パウロはこれを自分で体験しているから、あるがままを言っている。大変なことだよ、この内容は。「御意をつぶさに知り」ときたから。

10 **凡てのこと主を悦ばせんが為に、その御意に従いて歩み、凡ての善き業によりて果を結び、いよいよ神を知り、**

「主を悦ばせんが為に」、これは大事なことです。自分で主を喜ばせようとしたって、これは無理ですよ。

「主の喜びの中に入ると、主は喜びたもう」ということなんです。人間が工夫して、神さま・キリストを喜ばそうというのではなくて、キリストの喜びの中に入る。キリストの中に入れば、キリストの喜びの中に入る。キリストはまた喜ぶ。そうすると、主は喜ぶわけだ。主はおのずから喜び給うので、何もこっちから喜ばせるのではない。

「果たしてこれは主は喜んでいらっしゃるでしょうか」なんて、こっちの工夫を考えたってダメだ。くたびれてしまうよ、そんなことしたら。私の言うことはおかしいですか？　本当にそうなんですよ。やってごらんなさい。自分で何かしようと思ったら、くたびれますから。そして、その中に余計な偽りが入る。無理が入る。これも霊的な法則の世界、霊法の世界なんです。奇蹟でも何でもない。

11また神の栄光の勢威に随いて賜うもろもろの力によりて強くなり、凡ての事よろこびて忍び、かつ耐え、

「もろもろの力によりて強くなり」、上からの力で強くされる。これはみなパウロは自分の体験から言っています、教えているのではない。これは根底は全部、告白です。

12而して我らを光にある聖徒の嗣業に与かるに足る者とし給いし父に感謝せん事なり。

たたみかけて言っている。

パウロの書簡なんてものは本当は、そう速く読めない。一回に一章なんていう、こんな早足は普通はできないわけですけれども、ただ私はその気持をつかんでは皆さんと学んでいる。もう余り私はやってられないもの、正直な。まだ10年あるか、まぁいいや。

12而して我らを光にある聖徒の嗣業に与かるに足る者とし

もう本当にキリストの光を受けたり、力を受けたり、生命を受けたりしているものだから、パウロはこういう言葉が自然に出てくるんです。

あなた方、これを読む時に、パウロさんの気持になって読んでくださいよ。パウロと一つとなって。ヨハネと一つになって。福音書では今度は、キリストと一つとなったら凄いことになる。だから、福音書は凄いんです。そのうちにまた福音書に帰ろうかな。

●両極を渾然一如として

13父は我らを暗黒の権威より救い出して、その愛しみ給う御子の国に遷したまえり。

「暗黒」というものは、みな悪と結びついた概念になるけれども、我々は、もし昼間ばっかりだったらダメだよ、眠れやしない。夜がくるので、眠って安らう。人間には闇も大事なんだ。光と闇と両方とも大事。「陰陽」というでしょ。闇は陰の世界だ。動・静。寝ている時はみな静かだ。静かに闇の中で寝る。

だから、闇というと何でも悪いと思わないでください。闇もまた大事なんだ。陽と陰とがあるから。男と女がいるから。女がただ闇とは言っているんじゃないよ、間違えては困るけれども。要するに、二極、両極ということ。真理は両極をもっている。両極を渾然一如としている世界が本当の世界なんです。女でありながら、男性的なものがその中にある。男でありながら、女性的なものがその中にある。それが本当の人間なんだ。威張りくさってばっかりいるような男はダメなんだ。キリストはもの凄い男性です。けれども、彼はもの凄い女性です、神さまに完全に従っているでしょ。何ものも恐れないで動いているでしょ。女性道・男性道を身をもって表した者がキリストである。この両極がなければ、成り立たない。

だから、闇というと何でも悪いと思わないでください。しかし、闇はよく悪い事をする世界だから、夜になると悪い事をする。人が見ている所ではしないくせに、そういうドロボーがいるから。ドロボーは大体闇にする。昼でも人がいないと悪い事をする奴もいるけれども。

サタンは闇の代表みたいなものです。闇的存在。昔は闇市なんてものがあった。今は、テレビでいろんな妙な報道をやっている。みんなあれは闇世界なんだ。この頃、妙な人殺しが多い。冗談じゃない。本当に狂ってきた。人間界もまた自然法則から狂ってしまった。ということは、神の世界がいい加減になっているから。神の光を受けていないから。神さまは闇を送りはしませんよ。だけども、ヨブ記に光も闇も神さまが造ったようなことが書いてある。それは造ったというよりも、闇も人が寝れるように、地球を回転させているんだから、素晴らしいものだ。

●無罪の根源現実の中に聖霊が

14 **我らは御子に在りて贖罪（あがない）すなわち罪の赦（ゆるし）を得るなり。**

「罪の赦」は、いいですよ、赦しは。けれども、本当は、

「罪を根底的に取り除いてしまった。無罪にしてくれた」

ということ。

「お前は相対的な罪があるけれども、そんなことは問題にするな」

と。「救われている」ということは、

「もう罪無き世界を根底にいただいている」

ということ。だから、私は「無」と言っている。「無罪」の世界、そこには聖霊がくるんです。

「無罪の根源現実の中には聖霊がやってくる。相対的な罪の世界を、聖霊の世界が必ず勝っていく。蹲いても転んでも勝っていく」

と。お互いさま、それで本当に光の子なんです。相対的な良し悪しをどうのこうのと言っているうちは、その人の信仰がダメになる。

パウロが第一の「罪びとの首（かしら）」、第二の内村鑑三、第三が小池辰雄、これが罪の首（かしら）です。

「十字架は誰のためでもない、正に私のためだ」

と書いた。十字架は大黒柱で、幕屋の中には聖霊の空気が充満している。普通の教会の牧師さんはこんなことを言わない。もっと体裁（ていさい）のいいことを言っている。私は一番体裁が悪い。

●見得べ からざる神の像

15 **彼は見得べ からざる神の像（かたち）にして、万（よろず）の造られし物の先に生まれ給える者なり。**

「生まれた」という概念は本当はおかしいんだ。

「神さまはキリストを生んだ。キリストは独子だ」

なんて。これはおもしろい。普通の概念では、「神さまが生んだ」という言い方をしたら、本当はおかしい。けれどもキリストは、

「父よ」

と言っているから仕方がない。

「では、お母さんはどこにいるか？」

と、そんなことは考えてない。だから、宗教的な表現というものは、普通の常識でもって、それに戻して考えたらダメです。カトリックでは、マリヤを「母」と呼んでいるが、

「マリヤさんと神さまを二つならべているか？」

と聞いたら、何と答えるかね。

「その言葉の本当の現実は？」

ということだけを考えていけばいい。言葉の意味ではない。

「見得べ からざる神の像」

神さまは見えない。望遠鏡にも出てこない。顕微鏡にも出てこない。そういう存在を霊的存在という。その霊的存在をキリストは人格的な言葉で「父」と呼んだ。普通の我々の世界では「お父さん」は一家の拠り頼むひとだから、「父」という言葉を使った。「父なる神」というのは、「拠り頼む根拠」というわけだ。

その見えない神の、霊的存在の神の「像」であるという。「エイコーン」という字です。「モルフェー」「すがた」という言葉もあります。姿を変えることを、変貌することを「メタモルフォーゼ」という。「エイコーン」「像」というのは、絵画も描かれたる像、彫刻にできている姿もエイコーンという。割合にいろんな意味をもっている。

●キリストのエイコーン

ゲーテが『ファウスト』の終りの方で、

「あらゆる過ぎ行くものは　映像たるのみ」

（アッレス　フェアゲングリッヒ　イスト　ヌール　アイン　グライヒニス）

と言った言葉がある。あの「グライヒニス」（映像）が正に「エイコーン」（像）なんだ。似

たようなもの、似た姿。「グライヒ」というのは「等しい」という字です。

「あらゆる過ぎ行くものは、本体の、本質の似姿である」

という。神さまという霊的な本体の映像である。神の像、神像、これはキリストです。この「似姿」の「似る」という字は、私はあまり好きでないけれども。相似形というときにも、このエイコーンという字を使う。質的に同じような、同じものである。このエイコーンという言葉の意味は、どこまでも見えるすがたでもっているわけです。けれども、

「見えないものの見える姿である」

と。即ちキリストは、

「我を見し者は父を見しなり」

というのは、正にキリストは、

「神のエイコーン」

だから、「我を見し者は父を見しなり」と言った。

「私において神さまは現れているんだ」

と。現れている像（すがた）だ、本当は。現像なんだ。むしろ現像の方がいい。キリストは「神の現像」なんだ。本体の現像。このユリの花は太陽の光のエイコーンなんです。太陽の光は見えない。それのエイコーン。これはみな光っている。造り花は光らないけれども、活きた花はみな光をもっている。福音書のキリストは正に神のエイコーンなんです。我々はまた、

「キリストのエイコーン」

でなければならないわけだ。相対的な人間小池は、あなた方一人一人はいろいろな欠陥があるでしょう。けれども、本質的にはエイコーンである。キリストのエイコーンである。

「我を視よ」

とハッキリ言える。

「我が内のキリストを視よ」

と。だから、そういうエイコーン、映像、現像です。日本語で「栄光」という字がある。栄えの光。栄光というのは素晴らしい言葉だ。神の栄光体、キリストの栄光体。「榮」という字は、火が二つ上にあって、木が下にある。木が赤々と燃えているすがただ。

15 **彼は見得べからざる神の像（かたち）にして、万（よろず）の造られし物の先に生まれ給える者なり。**

「キリストは一切のものを造った」

とヨハネ伝に書いてある。

「神の言なるキリストによらざるものなし」

と書いてある。普通の自然科学的に考えたら、聖書は分からんですよ。

「キリストが造ったなんてことがあるか」

なんてすぐやる。とにかく、

「キリストは宇宙的な驚くべき存在」です。だから、お釈迦さんとはケタが違うと言っている。普通の常識的な頭で見るから、

「聖書なんか信じられるか」

なんて言うんだ。当たり前だ、それは信じられないよ。初めて私は聖書を読んだとき、

「なんだかわけの分からない書だな」

と思ったものな、今こそ私は楽しく読んでいるけれども。

16**万の物は彼によりて造らる、天に在るもの、地に在るもの、見ゆるもの、見えぬもの、或は位、あるいは支配、あるいは政治（まつりごと）、あるいは権威、みな彼によりて造られ、彼のために造られたればなり。**

凄いね。一切は、政治でも何でも本当は、キリストによって造られている。政治というのはそうなんだ、本当は。神さまの代わりにやっていることが、神制政治なんです。旧約の世界が本当はそうなんだ。

明治天皇みたいなのは、本当に自分でもって政治のたずなを使っていたような人です。本当の元首というものはそうなんだ。フレデリック大王だとか。アレクサンダー大王なんて凄いね、まだ30才にもならないのに、大変な人間だ。それはみな、「神の力によって」というわけだ。神の智慧によっている。そういう本当の政治家がいない。とにかく、そういう角度でいたのが19世紀には、ビスマルク、グラッドストーン、リンカーンだ。ゴルバチョフがだいぶんその角度を持っているけれども、失脚してしまった。

●十字架の血によって平安を

17**彼は万の物より先にあり、万の物は彼によりて保つことを得るなり。**

これは正にそのとおり。

18**而して彼はその体（からだ）なる教会の首（かしら）なり、彼は始にして死人の中より最先（いやさき）に生まれ給いし者なり。これ凡ての事に就きて長（おさ）とならん為なり。**

アダムの後裔（こうえい）は全部死んだけれども、キリストだけは死なない。そのことです。「生まれ給いし」という言い方はちょっとおかしいけれども。「長とならん為なり」ではなくて、初めつからもう、長なんだ。

19**神は凡ての満足れる徳を彼に宿して、**

「徳」という言い方はおかしな言い方ですけれども、

「プレローマ、充満を彼にやどして」

という、

「彼自身が充満だ」

ということです。何でも、良いものは彼の中に入っている。

20**その十字架の血によりて平和をなし、或は地にあるもの、或は天にあるもの、**

万の物をして己と和がしむるを善しと為給いたればなり。

「平和をなし」ではない、これは平安だ。キリストが与えたものは、平和ではない、平安ですから。「和がしむる」という言い方は私はあまり好きでない。万の物、人間の世界は神さまに逆らって、はずれている。それを、

「本当の元へ戻す」

ということ。「和らげる」なんて、何か和睦でもするような言い方をするが、

「己と本当の平安の中に入れる」

ということ。直訳すると、

「十字架の血によって平安をつくった。十字架によって平安を与えた」

ということです。「和らぐ」とよく日本語に訳してあるが、何か喧嘩したものが和睦するような言い方をするけれども、和睦ではないんだ。「平安を与える」んです。だからもう本当に、妙な概念から抜けでないとダメです。私は決してデタラメを言っているわけではないから。

コロサイ書はこれから後、また段々、凄くなりますけれども、非常に天的です。一番、天的かもしれない。エペソ、ピリピ、コロサイの、この三つの獄中書簡は渾然として素晴らしい。パウロはテモテ書で、

「自分は繋がれているけれども、神の言は絶対に繋がれていない。自由自在なんだ」

と言っている。だから、勝ち得て余りあるんです、パウロは彼らにとっ捕まっていても。決して、囚人根性でいるのではない。

「お前たちは気の毒だ」

と、もう熾んなる哉だ。本当に大したもんだよ。パウロという霊止は、本当に福音で、キリストの御霊で勝っている。常勝将軍だ。パウロがいなかったら、新約聖書は成り立たない。

要するに、パウロはキリストの正にエイコーンなんです。我々もまた、

「キリストのエイコーン」

として、一人一人がのっぴきならない姿をもって現す。エイコーンはみな同じではない。全体主義ではないですから。あなた方一人一人の良さというものは皆、特殊絶対の良さをもっている。一番本質的なものは比較を絶する世界です。我々は相対的存在でありながら、絶対的なものをいただいている。顔だってそうだ。T君と同じ顔をしている人は他にいないんだ。これは絶対性をもっている。似ているということはある。似ているだけではダメなんだ。だから、私は、「エイコーン」という訳で、似姿という言葉は嫌いだ。「映像、現像」である。まぎれもなく現しているということだ。

そういうわけで、皆さんも、自信ならざる自信をもって進んでください。